

★日本橋オペラ「イリス」

日本橋という由緒ある土地から発信する、個性派オペラを目指す目的で発足した「日本橋オペラ」。蛎殻町にある日本橋劇場を本拠に、これまで「トリスタンとイゾルデ」(2015年)、「トスカ」(2016年)と公演を展開し、今年はオペラ3作目となるマスカニ作曲の「イリス」を上演した。この作品はプッチーニの「蝶々夫人」も手掛けたルイージ・イッリカが台本を執筆している。作曲された1898年ころは、芸術分野で「ジャポニズム」が流行しており、この流れに乗って、日本を舞台にした「イリス」が制作された。富士山の裾野に住む夢見がちな少女が、男たちの欲望の犠牲になり、吉原に売られてゲイシャになるという哀しい物語だ。この旧吉原遊郭は現在の日本橋人形町にあったという。そのゆかりの場所で、初演から120年後となる今年、「イリス」が上演されたのだ。

「イリス」はその名のとおり、あやめの精のような儂い存在。自我もなく無邪気に太陽にあこがれ、かどわかされて吉原に売られ、谷底に身を投げる。幻想的で抽象的な雰囲気の濃い作品ゆえに、美しい旋律が散りばめられていながら、上演の機会はそう多くない。1985年に二期会と藤原歌劇団が合同で日本初演し(このとき、今回の指揮者佐々木修は、副指揮者をつとめたという)、以後東京での上演は数回を数えるのみ(今回で4回目だろうか)。

公演当日、珍しい演目ということもあって、日本橋劇場の400席余りは満員御礼の盛況。上演形態は舞台つきだが、オーケストラの代わりに、ピアノが伴奏をつとめた。館 亜里沙による演出は作品のテーマを「まやかしの

ユートピア」と捉えているという。紗幕を使って、ユートピアと現実世界を分け、揺れ動いていく人間の感情を、白と黒の衣装を着たダンサーが表現していく。台本作者のイッリカは、無垢なイリスと登場人物たちのエゴイズムを対比させることで、幻想的な物語に仕上げた。それゆえ、今回のように映像やダンスを使った抽象的な舞台は作品の本質にあつていると言えるだろう。一歩踏み込んだ解釈としては、イリスは2幕で自ら死を選び、3幕で主要登場人物が奈落(地獄)で死に絶え、暗闇世界でうごめく有象無象たちの歌が死者の弔いのように響く場面。まやかしのユートピアは消え、無だけが残る。

歌手は圧倒的な声量を誇る日本橋オペラ代表の福田祥子が主役を務めた。イリスは現実味のない儂い女性だが、アリアは強い表現力も必要で、特に2幕には有名な長いアリアもある。やはり、福田のようなドラマチック・ソプラノ級の声がイリスには必要なのかもしれない。歌唱ではキョウト役を歌った飯田裕之の存在が目立った。「蝶々夫人」の女衒ゴローと似た役回りで、演技も要求される役だが、演技力でも存在感を示した。

ピアノ伴奏による舞台付きオペラという珍しい形態だが、ピアノはなかなかドラマチックな演奏だった。全体を統括してまとめあげたのが、指揮者の佐々木修。予算の問題があると思うが、映像と衣装のみのセミ・ステージにして、小編成のオーケストラでの上演も可能だったのでは。特筆されるのが、プログラム。北斎や国貞の浮世絵などを配した美しい表紙で、川上貞奴の写真を掲載した日本橋人形町物語のエピソードなど、盛りだくさんの内容だった。

(石戸谷結子)